

中耳では骨の振動、内耳では液体の振動として伝わっていきます。内耳の液体の振動を有毛細胞が感じて神経に伝えることで、音としてとらえることができます。

子どもに多い中耳炎

子どもに中耳炎が多いのは、中耳と鼻の奥をつなぐ耳管が太く短く、耳から鼻までがほぼ水平なために、細菌が鼻から耳管を通して中耳に入りやすいためです。かぜをひくと肺炎球菌やインフルエンザ菌などの細菌が、せきやくしゃみで中耳に入り込んで、急性中耳炎を起こしやすくなります。治療が長引くと、慢性中耳炎となったり、滲出性中耳炎に移行する場合があります。

中耳炎の治療は短期間では不十分で、通常3カ月ほどの定期的な観察が必要です。治りが悪く、通院期間が長くなったり、不安なことがある場合は積極的に主治医に相談しましょう。

■急性中耳炎

急性中耳炎とは、細菌やウイルスによる化膿性の炎症です。主に、かぜをひいた後ののどや鼻にいる細菌やウイルスが、耳管を通して中耳に感染して起こります。副鼻腔炎など鼻の粘膜に炎症を起こす病気が誘因になることもあります。

耳が痛み、聞こえが悪くなり、耳だれがでることもあります。また、熱がでることもあります。

【注意点】

- ・心身の安静を守りましょう。
- ・入浴、水泳、洗髪、運動などは医師の許可を受けてからにしましょう。
- ・鼻を強くかまないで、左右別々にそっとかむようにしましょう。
- ・痛みがとれても炎症は残っています。完治するまで医師の指示を受けて、治療を続けましょう。
- ・急性中耳炎を繰り返すと、やっかいな滲出性中耳炎になることがあります。

■滲出性中耳炎

鼓膜の奥の中耳に分泌物がたまり、音が聞こえにくくなるのが滲出性中耳炎です。特に急性中耳炎にかかったことのある子どもはなりやすく、注意が必要です。

難聴、耳がつまった感じ、耳鳴りなどの症状があらわれます。痛みはないか、あっても少ないので、小児の約80%は自覚症状を訴えません。家族や先生が、返事が遅い、集中力が低下してボーッとしている、テレビの音を大きくして聞いているなどで、気がつく場合があります。

【注意点】

- ・鼻水、鼻閉のあるときは医師の治療を受けましょう。
- ・長期にわたる治療になることも多いので、主治医とよく相談しながら治療を進めましょう。

学童期の子どもに増えている心因性難聴

近年、学童期の子どもの心因性難聴が増加しています。家族、友人、先生などとの心理的葛藤、学校、家庭などの環境におけるストレスが原因で、外耳、中耳、内耳には明らかな障害がないにもかかわらず、難聴が発生します。

日常会話にはほとんど支障がないので、本人は難聴に気づいておらず、学校の健診で初めて発見される場合もあります。

心因性難聴は、長期にわたって難聴が続く、早期回復する、聴覚レベルが変動するなど、経過はさまざまです。まず器質的な障害がないことを、患者さんだけでなく家族が十分理解することが重要です。特別に日常生活に支障がない場合には、病人扱いをしないで、1～3カ月ごとに必ず聴力検査を受け、様子を見ます。さらに、原因と考えられる精神的ストレスを見つけ、その負担を軽くするように生活指導をします。必要があれば、心理療法を精神科医などで受けます。